

探訪マップ

# 銀の道

1:50,000





# 銀の道を歩こう

島根県大田市大森の「石見银山」は、1526年に博多の商人・神屋寿禎かみやじゆていによって発見されたと伝えられています。始めの頃、銀鉱石は大森から最も近い仁摩町ともがうら鞆ヶ浦という港から運び出されていました。戦国時代、毛利元就もうりもとなりが银山を支配するようになると、温泉津町ゆのつおき沖泊どまりを利用するようになりました。

江戸時代になって、幕府は银山とその周辺を直接治め、比較的安全となった陸上ルートが使われるようになりました。大久保長安おおくほながやす（初代银山奉行）は、大森から尾道に至るこのルートを整備し、巾7尺（約2.1m）道のり35里（約140km）の輸送路を完成させました。



これが一般に「银山街道」と呼ばれるもので、大森代官所から小原（美郷町粕淵）、赤名峠、布野、三次、吉舎、甲奴、甲山、御調を通過して尾道港へつながっています。馬300頭に人が400人という大輸送隊は、これを3泊4日の行程で銀を運んでいました。

このルート以外に、甲奴町から府中市上下町、福山市新市町、神辺町を経て大阪方面に向かうルートも利用されていたという記録が残っています。近年、沿線の町や村の開発事業によって银山古道の多くが消えつつありますが、道沿いにはまだまだ多くの遺跡が残されています。これらを訪ねながらゆっくりと歩いてみると、さまざまな再発見をすることができます。

さあ、銀の道をみんなで歩いてみましょう。